

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

Structure of verb phrases containing the particle  
“ni” ; with a summary in German

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石綿, 敏雄, ISHIWATA, Toshio メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00001014">https://doi.org/10.15084/00001014</a>

# 助詞「に」を含む動詞句の構造

石 綿 敏 雄

この稿は、現在国立国語研究が行なっている大規模な新聞用語調査の用語分析の一環として、助詞「に」を含む動詞句の構造について分析したものである。動詞句の構造を分析することは、基本的な文型を研究するための足がかりとなると同時に、用法からみた用語（名詞、動詞）の分類記述の目的もあり、用語調査の一環とするばあいは、後者の意味合いが強い。この分析では、使用したデータも十分とはいえないものであり、分析の方法も多くの問題点を蔵しているので、いわば試行的分析であり、中間報告のつもりである。

## 1. 目的と方法

この研究はいくつかの目的をもって行なわれている。すなわち、国語研究所が現在行なっている、大規模な用語調査の分析の一環として行なうという意義がまずあり、それはまた語彙論研究として、用法による用語の分類、分類用語表の再編ということを目的としているのであるが、同時にそれらのことがそのまま言語情報処理の基礎資料としても使用できることを期待している。以下、それぞれについて述べたい。

その第一は用語調査の分析ということである。現在国語研究所が行なっている大規模な新聞用語の調査は、短単位で数えれば三百万語にものぼり、まとまった研究資料としては空前の規模のものである。しかもすべて電子計算機のなかに読み込まれており、プログラムさえ作れば、さまざまな分析使用が可能である。したがって、この資料を用いて、さまざまな日本語の研究ができることと思う。特に、語彙、文法に関する研究資料として、多くの成果を生み出すことができよう。したがって、語彙調査を行なうグループのなかでも、さまざまな分析の計画が立てられている。この研究は、このようなさまざまな分析の計

画の一つとして、考えられたものである。

用語の分析、語いの分析といっても、さまざまな考え方ができる。現代雑誌九十種の分析では、語の基本度の研究、計量的な語い構造の分析といったような、計量的な面からのアプローチもあった。助詞・助動詞の用法、類義表現、語構造など、計量的なアプローチを含みながら、語の質的な構造をとらえようとする方向もあった。新聞の場合はこのほかに新聞などの層による、用語の相違、といった見方もできよう。今例をあげるならば、同じ「女性」を表わすにも、「女」「女子」「女性」「婦人」「婦女」などいくつかのことばがあるが、長単位単独で新聞の各層にどのように登場しているかを見てみると（報告37）、

「女」は広告、地方、婦人、家庭、社会、芸能娯楽、文化の欄の順、

「女子」は広告、スポーツ、労働、文化、経済、国際、の欄の順、

「女性」は広告、芸能娯楽、社会、婦人家庭、文化、国際の欄の順、

で出現している。それぞれ特徴があってもおもしろそうであり、たとえば、「女子」がスポーツ欄に多く出ることなど、注目してよいことであろう。このような類義語が、各分野の用語の相違とどのように関連をもつかなどは重要なテーマとなりうるであろう。

しかし、従来は、このような用語の分析が、どちらかといえば、用語の静態的な面に限られていた感がある。用語調査の目的がそのような言語の静態的な面の分析を含んでいることはいうまでもないことであるが、現代の言語学の要請はそれにとどまらず、もっと動態的な、行動としての言語の諸相の追究を目ざしていることを考えてみたとき、さらに新しい観点から用語を分析する必要性が感じられる。すなわち用語がコミュニケーションのなかにどのように参加してゆくかを直接見きわめることが必要である。そこで語の用法を重視する立場から用語を分析してみるという必要が、語い論のなかにも存在すると考えられるのである。あるいは、少なくとも語い論がそれに寄与することを考えなくてはならない。

この研究は、そのような、従来の語彙調査に欠けていた面を新しく取りあげようとするものである。単語を統辞的に孤立したものとせず、他のどんな要素とどのように組み合わせて用いて、どのように表現、伝達に役立ててゆくか

を見ようとする。単語を分類するとしてもそのような全一体的な言語運用から、あるいは用法の上から、これを行なうことを原則とする。すなわち、単語と単語がどのように組み合わせられて用いられるかということが、その第一段階である。このばあい、いわゆる自立語と自立語がどのように組み合わせられるか、が重要であって、このようなものがシンタグマ（ロシア語 Синтагма）（連語）と呼ばれるようになってきている。従来の国語学では、「時」という自立語と、「に」「は」などの付属語がついた「時に」「時には」などを連語と呼んだり、用言に助動詞のついたものを活用連語などと呼ぶことであったが、これと異なった命名である。この意味でシンタグマという術語を用いるとすれば、「助詞『に』を含む動詞句の構造」という標題は「助詞『に』を含むシンタグマの構造」といいかえてもよい。

チョムスキーたちのある時期の言語理論によれば、言語の記述は lexicon と grammatical rules の作成にあるらしい。このばあいの lexicon に記載されている内容は grammatical rules に書きこまれている word class の、個々の語についての注記であるはずであるから、grammatical rules を予定しなければ lexicon の内容を記述することはできないし、また記述しても無意味である。

言語をその運用の面からみると、この考え方はきわめて妥当であって、用語の研究はまずその語が言語運用のなかでどのように活用されるか、語が文のなかでどのように用いられ、communication の上に役立てられるかを見きわめなければならないはずである。その第一の段階が上に述べたような、ある単語が、どのような単語と共に用いられるかをみる、ということであろう。

単語と単語の組みあわせは、いわゆる句 (phrase) をいうわけであるが、日本語の phrase にはさまざまな種類のものがある。チョムスキーの初期の著作に出てくる

$$S \rightarrow NP + VP$$

や、日本語についてロゲルギストあるいは今井功氏の

$$\delta = S * d$$

( $\delta$  はセンテンス、S は名詞または副詞、d は用言) などの簡単な、あるいは思い切って単純化したものもあるし、いわゆる学校文法での文節間の諸関係の

ようなものもあり（多くの類似の他の種のものがあるが省略）、栗原俊彦氏の名詞——用言、用言——名詞、名詞——名詞、用言——用言、副詞——用言のような実際的な分け方もできる。栗原氏の「名詞＋名詞」は日本語では具体的には「名詞＋の＋名詞」の形が多い。「名詞＋用言」のばあいには「名詞＋格助詞＋用言」のことが多く、「用言＋用言」のばあいにも「用言＋接続助詞＋用言」の形になることが少なくない。標題の「に」は、「名詞＋格助詞＋用言」のなかの一部であるとみることができる。そして「名詞＋用言」が、今井文法で強調されているように、これが文構造解明のなかで、重要な位置をしめるものであることは、特にことわらなくてもよいことかと思う。そうしてこのような「名詞＋用言」が、日本語では多くのばあい、「名詞＋格助詞＋用言」の形をとるものであることも、またいうまでもないことであろう。格助詞としては「が」「の」「を」「に」「へ」「で」「より」「から」などがあって、それぞれ独特の用法をもっているが、どのような用言が、これらの助詞を介して、どのような名詞と結びつくかを研究するわけである。このような句構造、フランス語でいえば *structure syntagmatique* を取り扱おうというのである。それは助詞ごとに異なっており、それぞれについて解明してゆかなければならないが、そのばあい重要なことは、後ろに続く動詞などの意味用法によって、この句全体が特色づけられることである。つまり、この種の連語の構造は、まず第一に、その中核となる用言の意味用法の記述を中心として、明らかにしてゆくことが必要であろう。

用語調査における用語の分析として、以上のような考えから、新聞調査で得られた結果を中心として、語の用法の記述を試みたいと思っている。

この分析の第二の目的は、用語の分類を行ってみることである、ということは、初めに述べたところである。国語研究所では『分類語彙表』をすでに作成している。これは、いろいろの観点から用語をみて分類しており、特にその用法についてもかなり配慮されているが、全体としてはやはりその意味を中心としたものであるということができよう。これに対して、この種の研究のように、どんな文脈で使うことができるかという、いわばその用法を中心にした語彙表を作成することも考えられる。このことは、語彙の、種々の意味での選択

(たとえば国語問題のようなばあい)のばあいに、必要となると考えられる。そしてそれは、文法の研究において利用される grammatical rules と共に、言語の記述の最も重要な部分を形成することになるだろう。このように見ると、第二の目的は第一の目的を延長したものにすぎないと考えられる。

第三の目的は言語情報処理に関するものであるが、筆者の言語情報処理に関する立場は、現代の言語学の立場からそうひどくかけ離れていないので、結論から先にいえば第一の目的に全く同化してしまうのである。しかしそういっただけでは説明不十分なので、筆者の考え方をここに明らかにしておく。筆者は言語情報処理の幅広い分野とその研究開発は、言語学ばかりでなく、さらに広い多くの分野の人々が共同して当たらなければならないと考えており、そのなかで言語学者がまず行なわなければならないのは、言語に関する、特に自然語 (natural language) に関する、各種の性質の解明、記述にあると考えている。従来の伝統的な文法のフォーマットは、そのままでは機械にかけることがめんどろであるが、いわゆる展成文法の形式は、言語情報処理の開発にきわめて広く用いられている。この形式であると、機械にかけやすいのである。機械処理プログラムを実際に作成するばあいに、主として二つの方法があり、その一つはプログラムの手順のなかにいちいち文法的な問題を組み入れるものと、lexicon はもちろん文法規則もすべて表にして、全く表操作として行なう方法がある。いずれのばあいでも実は同じであるが、結局「辞書」と「文法」が必要である。ここで「辞書」と「文法」と、かっこをつけて書いたのは、やや広義に解きたいからである。問題を文の処理などに限定してみると、かっこは不要になる。プログラムの作り方によって異なるけれども、全く言語学的内容のものだということができる。そして計算機は全くこの言語記述によって動くので、どんなにささいなことでも、ゆるがせにできない。それを厳密に書くということは、すなわち言語の記述を精密にすることということで、言語情報処理の問題を解決することは、プログラムができている現状で、この意味では言語学研究を進めることにほかならないといえるのであるが、そのことは第一の目的である言語の記述が第三の目的である言語情報処理の研究と合致するゆえんでもあるわけである。言語情報処理の研究は一つの応用研究であると同時に基礎的な研

究の部分も包含し、いわば基礎的な応用研究となるものである。

言語情報処理には、言語研究の成果を応用して言語処理を目指すと共に、言語処理結果を点検することによって言語記述の精度や適不適を verification することができる。この意味で、語彙論、文法論、意味論の実験的研究であるという見方をすることもできる。語彙の記述、分類と文法の記述が整合しなければよい結果が出ないのだから、これらをつなぎあわせた言語運用全体のすがたを明らかにすることのできる、まことによき実験の場であると考えることができる。文法論・語い論の実験研究ができるのであり、これは言語学の新しい武器といえよう。そのように考えたとき、第三の目的はさらに重要な意味をもってくるのである。

筆者としては「構文解析自動化の研究 I」および「言語の意味と言語情報処理」において言語情報処理における基本的な問題について考え、その機械処理については「言語単位分割自動化の研究」(『計量国語学』50号、斎藤秀紀、木村繁との共同研究)に実践した。その結果連語研究を中心として、語彙、文法の研究に重要な未開拓分野があることを痛感し、その材料を作るべく「新聞用語調査の用例印字プログラム COBOL-KWIC」を作成し、これを運転することによって研究資料を作ることができた。今やこれを利用してこの研究を進めうる段階に到達したのである。

そこで、研究の目的についての記述を終わりにして、次の方法と研究資料について述べることにする。

このような句の構造、シンタグマの構造を、言語の事実在即してできるだけとらえるというような行き方は、西欧の言語学ではあまり行なわれていないが、ドイツに発し、ソ連の伝統的な文法学として発達した連語論のなかで、かなりよく体系立てられているということができる。東ドイツでは、多分この影響で Streckform の研究が進んでいるということである。日本では、奥田靖雄氏を中心とするグループが、この方面の研究を進めており、大量のデータを背景にした、すぐれた発表も行なわれている。しかしまだ、日本語の連語についての全体像は、発表されていない。

筆者は前に国語研の職員であった鈴木重幸氏の教示を受けてヴィノグラード

フやフォルナトフなどのソ連の文法理論の書を読み、奥田氏らの実践を参考にし、国語研究所で得られた大量の貴重なデータを活用して、この研究を進めてみたいと考えていた。用語の分類としては、さきの、林大氏が作成された「分類語彙表」を作業を進めるたよりとして用いてみることにした。言語情報処理という目的からは、言語処理の基礎とするという観点があり、この点で、従来の研究と多少異なるところがあるかもしれないが、前述のよのに基本的な線は一致しているはずである。

方法としては、まず用言（特に動詞）を意味によって分類する。次に同じ意味の動詞を集めて、助詞の前にある名詞の意味について調べてゆくという行き方をとった。意味の分類には、まず分類語彙表を参照したが、それが十分でないばあいには、「言語の意味と言語情報処理」（報告31所収）などで考えた手法を用いて補った。

単語が集まってシンタグマを作ると、そのなかで相互作用が生じて、用語の意味が変わってくることがある。たとえば、「東京に行く」というとき、「東京」はまず場所を示す語であるが「行く」があることによって移動の意味の影響を受け、移動先を示すようになる。この事実は、この研究の内容を国語研の研究部会議で発表した際宮島達夫氏から教示を受けたが、シンタグマ研究にとって、あるいは語の運用論にとって重要な事実である。「は」を含む動詞句の研究をすすめるに当たっても、このような点に留意してゆきたい。また、「国際金融について考える」といったばあい、「ついて」は形式的で、「国際金融を考える」というのと大きな差がなくなる。「ついて」は前とうしろをつなぐ役を果たしている。このように「つく」の用法はその連語の範囲を出た、さらに広い expression に及んでいる。このような点についても今後考えていきたい。

このような研究を進めることから、逆に助詞「に」の用法を考えることもできる。これについて、やはり上述の研究部会議で上村幸雄氏から教示を受けた。そこで、そのようなことに関して、および連語論をどのような観点から進めてゆくかについて、「に」を含む動詞句の構造を概観したあと、再び問題として取りあげてみたい。

この研究のデータは、国語研究所の行なった新聞用語調査であり、用例集の作成に前述の COBOL-KWIC を使用した。また科学研究費補助金を交付された「日本語の電子計算機処理のための基礎的研究」を進めるために作成した用語総索引も使用した。その他辞書類も使用した。このように、新聞用語調査以外のデータも使用したのは、新聞用語調査の語彙表作成作業が現在進行中でいまだ完了しておらず、COBOL-KWIC オペレーションを行なうための計算機使用割当て時間がきわめて少ないので、用例表作成作業が全体（300万短単位）の10分の1（30万短単位）しか進んでいないからである。COBOL-KWIC のオペレーションは今後も続けるつもりなので、将来はこの稿の用例をそれによって増補したいと考えている。

以上のようなわけで、この稿は例を補う意味で三種のデータが用いられているが、本来新聞用語調査の分析であるから、それが主になるはずである。この稿では

- を新聞用語調査のデータに、
- \* を辞書類所載の用例に、
- △ をそれ以外の作品の用例に

つけて区別した。△印のなかには、いくつかの小説類が含まれている。\*印として使用した辞書は「研究社和英大辞典」「スタンダード和仏辞典」「例解国語辞典」「用例学習国語辞典」などである。

## 2. 助詞「に」を伴う動詞句の構造

前述のように日本語の文法ルールのなかで重要な「名詞＋助詞＋動詞」という expression のうち、この稿では助詞「に」の場合を選んで分析することにした。

助詞「に」の意味としてはすでにいろいろの研究があるが、学校文法などでは、1. 「弟はうちにいます、六時に起きています」など場所や時間を示す。2. 「東京に着いた、下におりる」など帰着するところを示す。3. 「学者になる、秋山を委員にえらすだ」など作用の結果を示す。4. 「散歩にゆく、兄が私を迎えに来た」など動作の目的を示す。5. 「弟に泣かれて困った、生徒に歌わせ

る」など、受身・使役の表現で動作をなすものを示す、などの用法について説いている。

ここでは、はじめの時を表わすものと、場所を表わすものを分けることにするが、「に」自身の意味作用をまとめることはあとまわしにして、はじめに後ろに続く動詞によって分け、次に名詞の性質を考えながら、全体の構造を考えるという行き方としてみることにした。動詞の分類、名詞の分類には、前節で述べたように「分類語彙表」の番号を利用した。しかしこれにはこの分類をあくまで保存してゆく、という態度ではなく、できるだけ上手に利用してゆくという方向である。このようないろいろの点について問題がいろいろあるが、「に」自身の意味同様、あとで(3.)まとめて論じたい。

ここでは「梅にうぐいす」のような並列的な用法については、扱わない。受身使役の形に用いられるものは、そのシンタグマ自身、他の助詞(「が」など)を用いたシンタグマから変形してつくることができるので、ここでは扱わなかった。

「字を教える」も「生徒を教える」もともに一つのシンタグマであるが、「字を生徒に教える」という言い方はない。このように一つの動詞に同じ格でかかることができなのが普通である(「あしたあるいはあさって」などは別)。「に」のばあい、「五時に新宿に集まる」などということができる。そこで一応時間を表わすものは別にして分析した、しかし将来補う予定である。

## A 抽象的な関係。

この類は全体とすると助詞「に」の前の名詞の語類制限がゆるいものであり、動詞はどちらかというとな抽象的な概念のものが多い。さらにいくつかに分かれる。

A1 この類は最も抽象的な意味のものがある。グループによっては、形式用言のものである。

(a1-1) 抽象的な関係を示す動詞、「対する」「もとづく」「従う」「よる」

「かかわる」「関する」「関係する」「関連する」「つく」「おける」など。

一つのグループにまとめたということは意味が同じだ、ということでは必ずしもない。expression の構造に類似点があるというにすぎない。

このグループの動詞とその前にくる名詞が、連語形成上よくみられる意味用法上せまい相互制限をもつというようなことは少ない。これらの動詞の働きは、やや形式的、抽象的であり、文法的にいつて形式動詞あるいはそれに近い感じのものが多い。したがって、「について」「に関する」などの前の名詞と後ろの動詞あるいは名詞とが、意味上より強く関係する。たとえば「国際経済に関する報告」では「国際経済」と「報告」を結びつける役をするのが「に関する」であると考えられる。

この種の用法はきわめて多く存するので、新聞だけから例をあげておく。

- ベトナム戦役反対の一部平和運動に関する聴聞会
- 高校入学者選抜制度の改善に関する基本方針
- 国際経済に関する報告
- 東山さんに関する話題
- 在籍専従に関する規定
- ベトナム戦争に関する 同人 のアピール
- 米軍の地位に関する協定
- 東京都政に関する両党間の協定
- 生産者米価の取り扱いに関する政府の基本的な態度
- 総選挙実施に関する議案
- 売買参加人に関する都条令
- 不動産売買に関する一般相談
- ベトナム平和に関する四ページの広告
- 大統領の北爆再開命令に関する緊急討議
- 営業問題に関する二つの小委員会
- カナダは各国間の内容に関しては全くノータッチだ
- 非公務中の米軍人の犯罪に関し、第一次裁判権は韓国……

以上は KWIC で「カンシル」「カンシ」で得られた用例のすべてである。「タイシル」「タイシ」「ツイ(テ)」などはさらにずっと多いので、見本だけをあげる。

- わが国の発展途上にある諸国に対する援助
- 女の先生に対する父兄の考え方
- 建設工事費の上昇に対しては建設工事の合理化を
- 国際労働運動の発展に対し積極的に寄与する立場
- 税制改正についての答申案
- 女性のよりゆたかな暮らしについて一流人と共に考え語りあい

(a1-2) 「伴う」「つれる」など、ひゆ的な意味での随伴を意味する動詞。これも(a1-1)と似ている点がある。「伴う」は名詞につき、「つれる」は動詞についてこの意味を表わす。「つれる」の前が名詞のときは別の意味になり、伴って移動する意味になってこのグループには入らない(「〇見学につれていく」「〇近くの広場につれていかれた」など、人間の行動を表わす名詞について意向を、また場所を意味する名詞について移動先をあらわす、という移動動詞の一般的な性質を具備している)少なくともの新聞データの範囲ではこのように整理することができる。

- 工場収約化にともなう諸経費の増加
- 民間会社の過密に伴うコスト増
- 景気好転に伴うトラックの持ち直し
- 景気の回復に伴う生産の上昇
- 生計費上昇に伴う賃上げ要求
- 特惠廃止に伴う保証問題
- 放出に伴う一時的な株式需給面での変動
- 練習のレベル・アップに伴うこうした細かい注意が
- 賃金の平準化に伴って企業間の賃金格差は縮少した
- 景気回復に伴って下請けへの発注がふえる傾向にある
- 台風15号の九州通過に伴って23日朝から九州地方の空や海のダイヤが乱れた
- 人々の話が勢づくにつれて平賀連吉の表情は沈んでいった
- 修業がすすむにつれてやがて求道の目的が人づくりにあること、社品こそ生命であることを悟るようになる
- 生長するにつれて自分に生き写しの美しい顔立ちだったから
- 太陽に近づくにつれて温度がまし
- 牛乳の消費がのびるにつれ各乳業会社同士の市場拡大競争がはげしくなり

(a1-3) 「分ける」「分かれる」「分類する」など、2.1552。「分かれ」たり、「分けられ」たりするものがこの動詞の前に列挙される。これらは「、」で区切られたり、「と」でつながれたりすることが多く、あるいは分けるカテゴリーの数を示す名詞が前にくる。「グループ」「組」「編」などグループを意味することばがある例は少なくない。名詞については、語彙上の制限を設けることがむずかしい。

- スタッフは有線、無線の各グループに分かれ
- 全国の代表的釣場を紹介したポイント編、食生活をにぎやかにする料理編などに分かれている
- 日

本にいない珍しい鳥の声も含まれているというのが、この「北欧の鳥たち」、8月1日から文化放送「朝の小鳥」朝6時35分の時間に北欧編、ヨーロッパ大陸編、公園の鳥などに分けて紹介される。○白組赤組に分けて ○東大出版会から全3巻、上、下および別巻「関係文書編」に分けて出版され ○黒人と白人に分かれ ○生物を植物と動物に分ける ○三つの音階に分ける ○等分に分ける

(a1-4) 「あたる」という動詞。時間など推持するものの一部であること。こるいは……である、相当するなどの意。時間に関する意味を表わす語(1.16)、数字などのことが多いが、その他のものも少なくない。名詞の語類は定めがない。

○減少の年にあたっている ○一昨年が最少期にあたる ○56%にあたる  
○裏側にあたる ○各種学校にあたる ○南側にあたる ○日本の巨人軍にあたる人気チーム

A2 この類は助詞「と」と置きかえることができるもの(語によっては不可能なものもある)。

(a2-1) 異同を示す動詞、「似る」「似かよう」、「応ずる」「準ずる」「当たる」、「合う」など、『分類語彙表』2.112に属するもの。

これらの動詞も前項(1)の動詞と同様この種の動詞と先行する名詞とが、語の種類に制限を加えあうということは少ないと思われ、名詞と動詞の後ろにある名詞、動詞あるいは前にある名詞(「が」「を」格の)とが意味的な関係(「似る」などの)をもつことが多いといっておく。

○堂々めぐりに似た悪循環 ○団地が建設される市町村役場、これに準ずる地域で営業中の方は \*臨時の参加者は正会員に準じて取り扱う \*収入に準じて会費を出す ○若い大山巖は人相も骨格も兄弟以上に吉之助に似ているといわれるが、

(a2-2) 「比べる」「比較する」など2.3061 比転の意味の動詞。この類も、前項、前々項と同等のところがある。

○日本の所得水準は欧米先進国に比べて低い  
にあつては日本の所得水準と欧米先進国のそれとが比較されている。この二つが関係をもつようにしむけるのが「比べる」であるといえる。

○四月が昨九月期に比べて ○同じ年齢のこどもに比べて ○前回の調査に比べて ○一般街道を走る車に比べて  
「……に比べて」という言い方ではその前の「を」がくることが少ない。

(a2-3) 「照らす」2.515という動詞が助詞「に」をとると多く「比べ合わせる」という意味になる。「比べる」にくらべ用法がせまく、「情勢」(1.1301), 「原則」(1.3080)などの語と共に用いられる。

○一切の情報に照らして ○それぞれのばあいの情況に照らして ○人事交通の原則に照らして \*事実に照らして

(a2-4) 「きめる」「きまる」「決定する」など、決定の意味の2.3063の動詞。名詞は決定されるもの、あるいはことを示すが、これに語類のわくをはめることはむずかしい。動作をすること(1.3)のばあいが、やや目立つ。

○下山することにきめた △Kさんは登ることにきめた(志賀直哉「焚火」)  
○体育の日にきめた ○パブリカにきめる  
「下山すること」は「下山」ということもできる。

A3 この類は「する」「なる」を属せしめた。これは動詞のなかでも最も複雑なもので、本来いくつかに分けるべきであるが、ここにまとめた。

(a3-1) 「なる」2.122という動詞。この動詞の用法は「する」と同様複雑であり、ある意味で「する」と対応しているところがある。

a. 「……が……になる」の形式、すなわち『名詞1』が『名詞2』になる」の形式のとき、名詞1と名詞2が分類語彙表で大体同じ番号になる

例。

○これが一種の引きつぎ事項になる ○……することが緊急の必要事になっている ○これが無法運転の誘因になっている ○不快指数も「全員不快」の81になった ○横文字を使わずにヨーロッパの通になる ○特異な才能を見せて人気者になった ○前は看護婦さんになろうと思ったが ○一人前になった記念 ○一人で二つの宗教信者になって平気 ○明るい世の中になる ○予算でいい世になれ ○諸君も勇気をもって開拓者になってほしい ○大岡越前守になる尾上松緑 ○「戦犯」にならないためには南ベトナムの指導者たちは…… ○鬼若から弁慶になる終局 ○ウクライナと白ロシアがソ連と並んで国連加盟国になっていますが ○最近支所長になったばかりで本人から話をきいていないので… ○英国の議員先生が「浦島」になったのも無理はない ○無給医局員が一人前になるために ○法務学者になれば大成すると思う ○麻薬取締官手帳を見せ、麻薬Gメンになりすまし ○岡先生が東大の法学部長になり ○開設支店長になって単身赴任した敬一郎 ○須藤さんと同じ関係で捕虜になったのは約二千人 ○一躍国際的英雄になった ○大曲市……大曲市と盛岡市を結ぶ内線が完成、中心都市になる ○三年で管理職になれる ○この春OLになるお嬢さんへ ○当然扶養家族になるものを扶養家族にしていなかった ○保健所長になった杵渕さん ○細菌の研究をする人になりたい ○同処が北の丸公園になるため廃止にきまり ○その作品がすでに現代の古典になって ○上流社会の物語だけになりがちなこの作品 ○第二次大戦後に国立オーケストラになった ○チャイコフスキーの協奏曲が課題曲になっている ○乱費批判が一つの合言葉になり ○モンゴル問題は国務省の検討議題になる ○国務省では同会議が……大がかりなベトナム政策再調整会議になるものと ○ワルシャワ条約機構の首脳合議がもし同機構の政治諮問委員であるなら、1965年以來のソ連圏の大きな会議になる ○国際貿易港になった直江津港 ○銀ブラ族のためのプロナードになりそう ○よし いもいちぢも赤いもみじの葉になって

b. 名詞1と名詞2が同じでないもの。これは更に細かく分けることができ

ようが、今一括して挙げておく。

○バスの右車輪がみぞにはまって事故になった ○歯の病気の原因になる  
歯石の沈着 ○家のあとしまつはすえのだけにまかさされる結果になった  
○こういう結果になった ○いかに忠実に再生するかが重要なきめてになる  
のです ○最悪の事態になったばあい ○このような事態になったのは  
○何らかの打撃で失神状態になったところでピストルをうばわれ ○証拠  
になる資料 ○大穴になったサンケイ賞 ○若い男がうつぶせになって死  
んでいる ○社会科学ものが下り坂になった ○船が機体の位置を示すブ  
イに横付けになり ○交通止めになった ○コスト割れになっている ○  
資本の一億ドル増額になるインドネシアおよびスイスの新規加盟の証人  
○来年は延長になっても能力開発制度の検定で ○最終段階になってソ連  
側がもちだしてきた問題 ○当社株の放出がいつになるか ○調査資料が  
いつになっても出されない ○春になれば ○毎年春先になると空巢がふ  
え ○夕方になると磯から磯と船が人を集めて ○復旧は8日夜半になる  
見込み ○首脳会談開催は10月になろうが ○南ベトナム政府はことしに  
なって三月下旬に来日を申し入れ ○そのころになって「故障中」の紙の  
○最近になって求人に乗り出した ○最近になって急にその数がふえる傾  
向にある ○……さんの帰りが遅れ、23日朝になった ○二幕目になると  
いつしか両者のはげしいのしりあいになり ○休会明けにならなければ  
見通しはつかない ○二か月後になって五千円の罰金を ○鉄骨の下敷き  
になり首の骨を折り重態 ○足首の白がシンプルなアクセントになってい  
る ○クルド族問題の平和解決をすすめられるかどうか、最初のやまに  
なるだろう ○刈り入れ申しこみが去る四月から上向きになり ○もう一  
度生まれ変わらせる方向になってきたということであろう ○ふたつの心  
がふれあった瞬間からひとつになるまでの瞬間を ○豚の日本脳炎が80%  
になったため ○3,700円程度になる予想です ○高卒で11,000円程度に  
なるみこみだ ○姿勢制御がすんでから毎秒25回のスピンを与える計画だ  
ったが、これが約6回になった ○太陽に近づくにつれ温度がまし、再び  
遠ざかったときは二百度になっていた ○北浦のまぶなは大型は産卵中で

いっぶくだが、中型がよい日には2, 3キロになる ○道路の右端を一列  
になって気をつけて歩いていた ○六月になって真夏の太陽に照りつけら  
れると ○6日になっても帰ってこない ○四十七才になたっチャプリン  
だが ○会社員、東京へ出て五年になるが ○両親と二才になる妹と四人  
で ○ご正解者が何名様になろうとも ○ひとりっきりになると ○この  
年齢になると ○台湾が一番札になったといわれる ○肉眼でもはっきり  
みえるほどになった ○数十万倍以上という高倍率になると ○殺到する  
ので、大変な競走率になる ○「羽化登仙」もかくやと夢心地になる ○  
ほかの方のごめいわくになりますので ○お互の勉強になる点を指摘し  
○あまり自慢にならぬ茨城名物 ○ベテランにも参考になる ○キャンセ  
ルになった用船計画 ○権力をねらう肉親争いなどがテーマになっている  
○「匂いが出る映画」として話題になった ○教科書編集者の間で話題に  
なっている ○この分野の発展に役立てようというというのがねらいにな  
っている ○野外彫刻公園のような展示になっている ○古い話になりま  
すが ○あれ、喜劇になりますよ ○この立体が芸術になるためには ○  
……を受けましょう」というのがスローガンになりそうだ ○昼休になっ  
たが暑くてたまらない ○ベテランたちが顔をそろえる豪華な配役になっ  
たという ○日豊本線汚職事件で無罪になった是非 ○観客にとっても大  
きな負担になっている ○世界的なヒットになった前作 ○話しあいがつ  
かず物別れになった ○今回は第5回の会合になる ○現在の教育体制の  
犠牲になる ○切り合いになりますか ○インフレになるおそれはない  
○ことしは損になりました ○予定価格で現金販売になります ○塩を用  
いると洋風おにぎりになります ○使い方によっては発がん剤になる ○  
ビルになっても各部屋の入り口に ○青になった信号灯2 ○どろんにな  
ってぶつぶつといった ○50歳くらいの男が心身黒こげになって死んでい  
た ○関東南部は絶好の樓日和になりそう ○キャビンの前部から火災に  
なり ○ちょっとした失敗が大火になりかねない ○プロパンガスがたま  
ったところへちょっとした火が接触するとまちがいなく大爆発になる ○  
ひとりっきりになると急に仏頂面になる ○すべすべした白い肌になる

○火ぶくれになりません ○孫が病気になった ○カメレオンが病気になったり

c. 「ことになる」「ものになる」など。多くは形式的。

○教授が指導することになっている ○試験の日程を発表することになる  
○税が免除されることになる ○数時間遅れてつくことになる ○ごっそりもっていかれることになる ほか

○いかに空虚なものになりつつあるか ○内閣の前途は困難なものになりそう ○……という趣旨のものになろうとしている ○ただし「自分のものになる」などは少し違った用法

d. 敬語の『『お』または『ご』+動詞など+に+なる』の形。

○およみになる ○番号をおかけになる ○ずばりお答えになって ○お選びになる ○お使いになる ○おいでになる ほか

e. イディオム

○気になる ○カカオはものにならず

なお以上のほかに「当たり前になる」「めっちゃめっちゃになる」など、分類語彙表の関係のものがあるが省略。

(a3-2) 「する」という動詞。本来いくつかの用法があるが、一まとめにして述べる。この動詞は「なる」と関係がある。かりに次のように分けた。

a. 「AをBにする」という表現のとき、AとBの語類がひとしいばあい。

○扶養家族になるものを扶養家族にする ○手術をして元気な体にする  
○ここを前進基地にする ○安保理を休会にする ○わたしを議長にしてくれ  
○エッセイ集を教科書にする ○担任は男の先生にしてくれ ○女をさらっては奴隷にしている ○音楽院の教授をメンバーにする ○……をリーダーにする ○……を銀行預金にする

b. 「AをBにする」という表現でAの語類とBの語類が等しくないとき。

○両性ホルモンを主軸にする ○新潟東港を中心にした ○管弦楽団を主にしたポピュラーなもの ○株価収益率をきめてにする ○……を無抵抗の状態にして殺害 ○40人の陣容にする ○これを一年短縮する方向にする

れば ○足許をおしゃれにする ○歴史をテーマにする ○官能をテーマにする ○地震予知をテーマにする ○かどうかを問題にする ○……を文学にする ○……ことを看板にする ○……を村八分に作る ○……を一週間の停学処分にする ○……を不起訴処分にする ○借金の担保にする ○死刑執行人を職業にする ○……をからあげ、バタ焼きにした ○大根と人参をもみじおろしにする ○生活を浮き彫りにする ○葵の紋を浮き彫りにする ○米国の施設を浮き彫りにする ○羊毛をセーターにする ○(うた)をレコードにする ○このことをパンフレットにする ○金融機関の引き合いを背景にした ○「高砂や」をバックにした ○徳川慶喜をあばたづらにする

以上 a b 両項では「Bに動詞」の表現のBと動詞の語彙論的な関係というよりは「AとB」の組み合わせと動詞「する」の関係が重要であるといえよう。もしそうだとすれば、便宜的に分けたA=B, B=Bの分割は、大別法としては意味をもつといえる。この点「なる」も同様である。そして、cのなかには似たものがあるが、dの用法とも異なるといえよう。

c. 副詞、形容動詞などと結合するもの。これは本来この分析で扱わなくてもよいものであるが、便宜上ここに付記しておく。

○……であることを明らかにした ○志を新たに作る ○静粛にする ○火を粗末にする ○清浄にする ○地位を不動にする ○この町を有名にする ○決意を北に明らかにする ○立場を明らかにする ○問題をうやむやにする ○食生活をにぎやかにする ○もとどおりにする ○心をゆたかにする ○暮しをゆたかにする ○問題が明らかにされる ○すべてをオープンにする ○国民のめいわくを最少限にする

d. イディオマトリックな表現。

○気にする ○手にする ○別にする ○ばかにする ○口にする ○ものにする ○たよりにする ○……を前にして ……○を共にする ○……をことにする ○……することにする ○(形容詞)ものにする ○……にして ○……にしてみれば ○……にしても ○……にしたところが ○……するにしても ○……にしては ○どのようにして

B 移動動詞。この類の動詞はCの類と似ているが、「動き」がある(+action)点で特徴をもつといえる。その結果一般に別に助詞「から」「まで」などと結びつき、「へ」と交替しうるものが多い。助詞「に」の前には +locative の名詞が来る。もし人間の行為をあらわすものがくれば、目的を表わす。(これ以外の動詞にもあるが、この類の動詞は概してこの傾向がある)。

(b-1) 「動かす」「動く」など移動を意味する2.1510の動詞。場所とくに方向を意味する名詞を伴うことが多い。その名詞はこれらの移動の動詞の影響を受けてこの連語のなかで移動する方向を示すようになる。

○カムチャツカ東沖をゆっくり西南西に動いている低気圧 ○大統領支持の方向に動く ○つまみをもって左右に動かしてください。

(b-2) 「移す」「移る」「移動する」など2.1521の動詞。主として人間活動の場を示す名詞1.25~26など使われる。1.17の名詞につくことがあるが、例が少ない。「移す」は、その対象を示すことばを「を」で示すことがある。

○政府・福原間の契約をこの会社に移した ○北足立郡新座町に移した ○米海軍基地に移った △場所に移す

(b-3) 「行く」「来る」などを中心に、「おもむく」「かえる」などの動詞2.1527。場所の意味のある名詞1.24~27, 1.17, 1.524~29などと結びつく。

\*学校にいく ○テレビのスタジオにしてみる ○地方にいて ○本多会長のところにおいて ○病院にいった ○北海道にいき ○休憩室にいかないで △戦争中は旅順の方においていた(「三四郎」)

このばあい「へ」の例がかなり多い。

○学校へいく ○そちらへいく ○パリへいく △傍へ往って「どうした」「どうした」と申しました(「高瀬舟」)

「来る」はほとんど「に」

○婦人達まで現場に来て ○水辺に来たら泳ぎたくなくてつい ○屠殺場におもむく ○岡山に帰る ○静岡に帰って ○自宅に帰った ○病院に帰っ

てきた ○実家に帰り ○内地に帰り ○サザンプトンに帰る ○江戸に帰れ △久しぶりに郷里へ帰ってこどもに会うのはうれしい。(「三四郎」)  
人間活動を示す1.3の名詞につくと目的・意向を示す。このばあい、動詞の連用形も用いられる。

○見にくる ○手術にくる ○静養にくる ○スキーにくる △そこへ下女が床を延べにくる(「三四郎」)

○人を集めにいく ○日本まで引き取りにいけない ○手つだいにいく。

○海水浴にいったとき

「かえる」のばあい次のような用法がある。

○エルザが野生にかえってゆくくだりが ○聖書にかえれ

(b-4)「たずねる」「おとずれる」「さそう」など2.351の動詞。場所を意味する名詞(1.2)と結びつく。

○夢の世界にさそう ○千葉の別荘にさそってくれた ○国王を宮殿におとずれる ○家にたずねてきた

人間の行動を意味する名詞につくと意向などを表わす。これに動詞に移動の意味があることにもよる。この意味ではこれらの動詞に移動動詞と共通の semantic feature をもっているといえよう。

○弔問に訪れる

「たずねる」「おとずれる」「さそう」などは人を意味する名詞と結びつくときは助詞「を」をとるのが普通である。これらの動詞句が、condensation (パイイの用語)あるいは transformation (ハリスの用語)を受けるときは、「人に」の形になることがある。

平穏な生活を送っていた繁子に訪れた悲しみ

これに対し、動詞「あう」は、人を意味する名詞と結びつくときは助詞「に」をとる。被害を受けるという意味要素を含む、あるいは伴う名詞主として人間の行為(1.3)、自然現象(1.5)のばあいも「に」をとる。

○交通事故にあう ○なだれにあう ○はさみうちにあう ○被害にあう

○友人にあう ○朱徳氏らにあう

(b-5) 「むかう」が移動の意味のとき。場所を意味する名詞(1.17, 1.25~27, その他), 方向(1.15)の名詞などにつく。もし人間活動を示す名詞(1.3)につけば意向を示す。

○北海道松前高にむかう途中 ○アルジェリアにむかった ○千歳空港にむかった ○座間キャンプにむかって ○バス停にむかって ○大幅反落にむかう ○上昇に向かう ○実現にむかう

○救出にむかう ○ガソリンを積みにむかう

「のぞむ」は前に「委員会, 国会, 交渉, 選挙」などがつくと2.35の意味になり, 「そう」は「規定, 使命, 必要性, 提案の線」などがくると2.111の意味になる。

(b-6) 「ぬける」2.1531が移動の意味のとき。1.17, 1.2などの名詞と結合。

○台風は八丈島の東にぬけた

(b-7) 動詞「でかける」。2.152に属する。「行く」にかなり近く, 場所の意味のある名詞, 1.25~27, 1.5などにつく。助詞「へ」を伴うこともある。

○地裁へでかける ○別荘にでかける ○部落へでかける

直前の名詞が1.3関係であると意図, 目的を表わす。

○しごとにでかける ○アルバイトにでかける ○教務課長は車のところまで説得に出かける

(b-8) 「出る」「出す」など2.1530の動詞。場所を意味する名詞(1.71, 1.24~27)に結びつく。

○表面に出る ○前面に出す ○外に出る ○学界に出す ○世に出す

○大会に出る ○公判廷に出る ○パリに出る

人間の行動を意味する名詞について, 意向を示す。

○買物に出る ○応待に出る ○取材に出る ○調べに出る ○かせぎに出る

人間の行動関係の名詞についてそのような行動をとる意(「出る」だけ)。

○衝空を回避するため適切な行動に出る ○交通違反の態度に出る ○俸銀

に出る(将棋) \*高飛車に出る

そのほか次のような用法がある。

○授業に出る ○テレビに出る \*新聞に出る

(b-9) 動詞「はいる」(2.1530)。

人間の行動の場を意味する名詞(1.24~27)と結びつく。

○特別室にはいる ○委員会室にはいる ○茶の間にはいる ○羽田にはいる  
△その女が車室にはいつてきたときは(「三四郎」)

機関を示す名詞のばあいは「就職」を意味することがある。

○外務省にはいる ○保健所にはいる

次のようなばあいも、広い意味での場所を意味するもののなかに入れることができよう。

○試験管にはいつている ○封筒にはいつた ○海にはいる ○体内にはいる

時間、経過、段階などを意味するばあいは、その段階に移行する意味。

○中盤にはいる ○シーズンにはいる ○夏休みにはいる ○段階にはいる  
人間の行動を意味する名詞のときは主として「開始」を意味する。

○協議にはいる ○作業にはいる ○撮影にはいる ○質疑にはいる ○ストにはいる  
○双方が武器を引いて和平の話し合いにはいるべきだ  
イディオム

○耳にはいる ○手にはいる △女の帯の色がはじめて三四郎の目にはいつた(「三四郎」)

(b-10) 「送る」「届ける」「もたらす」「運ぶ」「届け出る」など2.1521あるいは2.383の意味の動詞グループ。多く人間活動の場を示す1.25~27の名詞と共に用いられる。人間のこともある。

○精悍な青年をモロッコの飛行学校に送ったこのまま地検に送る ○副首相をバンコックに送って ○東欧諸国に秘密裡に送った書簡の全文 ○地検に送り ○銀行が直接客に送り届ける ○予算案は参院に送りこまれた ○プ

ラスを米国にもたらす ○横須賀署に届け出る ○伊東署に届け出た ○松平家に運ばれた ○竹芝棧橋に運ばれて ○近くの病院に運ばれて ○フィゲレデさん宅に届けられる日も近い \*功労者に記念品を贈る

○妻のもとにもたらされたおそろしい夫の秘密

最後の例では「もと」ということばが用いられ、いわゆる「場所化」の手続きがとられている。

(b-11) 動詞「派遣する」2.363。場所を意味する名詞1.24~27, 1.17と結びつく。

○係官を千葉県警に派遣した ○特捜班を現地に派遣した \*記者をイギリスに派遣した

人をあらわす名詞を「を」で示す。

(b-12) 「着く」「到着する」「達する」「到達する」など、到着を意味する2.152の動詞。場所を意味する名詞(1.170, 1.259, 1.26~27)などを伴う。

○大阪につく ○大牟多に到着 ○ホノルルに到着 ○空港のスポットに到達 ○限界に達する

最後の例はややひゆ的であるが、時間・経過のある点、人間の行為のなかのあるところ、などの意味で、1.16, 1.19の名詞や、1.3(人間の行為)の名詞を伴うことがある。これは「達する」という動詞に多い現象である。

○了解に達する。 ○直接目で見ると到達した ○人口が九百万に達する(この意味では「及ぶ」という動詞もある)

(b-13) 「着陸する」(2.1521)。特殊な意味であるが、1.17, 1.2, 1.5などの名詞とともに使われる。

○羽田空港に着陸 ○千歳空港に着陸 ○月世界に着陸

(b-14) 「かけよる」「迫る」「接近する」など、2.1560の動詞。場所を意味する名詞1.24~27, 1.17その他に結びつく。

○委員長長席にかけよる ○日セメが百円大台に接近し  
次の例はイディオムの。

○胸にせまる

(b-15)「逃げる」「逃げこむ」「逃走する」など 2.1525 の動詞。場所，を意味する名詞1.24～27, 1.17などと結びつく。

○実家に逃げてきた娘 ○薩摩屋敷に逃げこみ ○警戒線を車で突破し大町市方面に逃走

(b-16)「追いやる」「追いこむ」など 2.1525 の動詞。  
場所を意味する名詞と結びつく。

\*路次に追いこむ

次の用法はややひゆ的。(前の名詞が非場所)。

○死に追いやる ○解散に追いこむ

(b-17)「集まる」「集める」「つどう」など集合 2.1555 の動詞。場所を意味する名詞1.24～27, 1.17などと結びつく。「集める」は他動詞

○ここに集まった生き残りの人 ○自宅に集まった人々 ○喫茶店に集まる少年たち △新宿につどう

「集まる」「集める」の主語がどちらかといえば animate であるのに対し、「集中する」は inanimate になることがありうる。

○財政支出上半期に集中 ○光線を一定の方向に集中して送る

(b-18)「進む」「退く」など進退を意味する動詞。場所，方向を意味する名詞と結合する。

○山中僻遠の地に退く \*前へ進め

「進路をとる」なども方向を示す名詞につき

○北々西に進路をとれ

(b-19) 「さしかかる」2.1524 という動詞。移動先でなく、移動のとき通過する場所を示すところの、場所を意味する名詞につく。

○日比谷を曲って榎田門にさしかかる

時期、経過の意味の名詞であることもある。

○彫刻がこういうまとまりの時期にさしかかった

(b-20) 「返す」「返る」など2.1527の動詞。場所を意味する名詞と結びつく。以下三者(b-20～b-22)は移動と少しちがうところがある。

○部分「防衛」を日本に返す \*落しものが持ち主に返る

(b-21) 「進学する」ばあいによって「進む」など2.334の動詞。1.263の名詞すなわち上級の意味を含む学校を意味する名詞につく。

○大学に進学 ○今年高校に進まれる方に

(b-22) 「勤める」「勤務する」「働く」など2.332の動詞。主として人間活動の場(1.262～1.265)の名詞と結合する。

○神奈川の工場地帯に働く人々 ○証券会社に勤めて ○同店に勤める ○保健所に勤める若い医師 ○グァンタナモ基地に勤務

C 移動ではなく、+action とはいえないが、人間などが行なう動作、あるいは具体的な動作を示す動詞グループ。このグループの分類はまだ十分でない。

C1 移動ではないが主として人間などが行なうある種の動作。一般に「に」の前には場所や方向を意味する名詞がくる。

(c1-1) 「ある」「存する」「ございます」「いる」「おる」「いらっしゃる」など存在を意味する動詞、2.120 関係。これからしばらくは存在またはそれに類似の動詞グループの連続である。2.120のグループが結合する名詞は主として1.17に属する名詞グループであるが、1.25～1.26などもこれに準ずる。「ある」

は inanimate, 「いる」は animate の主体に対して用いられる。このグループの動詞の用法は

- a. 場所を意味する名詞, あるいは活動の場を意味する名詞についてその場や場所に存することを意味する。

○枕もとにあった栗原さんの腕時計 ○草津温泉は1200mの高原にあり  
○薬局・デパートにあります ○中国がこの戦争の域外にありたいと考えている ○奥にある休憩室 ○サイゴン市内の川べりにある会議用ホール ○法善寺の境内にある一流亭 ○公園にある森林 ○米原付近の変電所にある ○新橋にある東京慈恵大病院に入院 ○地球の上空にある電離層 ○上部にある展望台 ○五日市街道沿いにある同署西松交番  
○近くにある日本エンジニア・サービス会社 ○中区錦三丁目にあるM喫茶店 ○スカイラインのところどころにある見晴しのよい駐車場 ○米軍基地内にある売店 ○境内南の端にある東照宮本殿 ○ホームの柱にあるスイッチ ○町の広場にある大時計 ○駅構内の笠間踏切にある線路支障報知装置 ○線路わきにある十階建のビル ○線路わきにある変圧器

○あの男まだ社内にはいた ○事務所にいた若い男 ○トラックの助手席にいた村上さん ○日本にいない珍しい鳥 ○上の階にいる人 ○都営住宅にいる幹部職員 ○彼女のそばにいて何か慰めを感じて ○地上にいる米国の隊員 ○上の家の戸口にいる人 ○同居しているときは目の前にいるから落とすこともないが。

- b. 人間活動を意味する名詞 (1.3……), 地位・時・地位 (1.16, など), 人間とそのグループ (1.2 など) を意味する名詞を伴って, その範囲を示す。これは動詞「ある」系のみの用法。

○教育の目的は社会人の育成 (1.3) にある ○発展途上 (1.16) にある諸国 ○絶頂 (1.16……) にあった梅幸 ○不況下にある経済問題  
○共産主義体制下にあるアジア地域 ○のそ権限は教育委員会 (1.2……) にある ○敵対関係 (1.1) にある人 ○大国の間に戦争を誘発しようということにある ○時代層を反映していることにある ○実を結びせ

てゆきたいという点にある ○科学の近代化実現にある  
これらの用法はさらに細分化できるかもしれない。「こと」のばあいはその前の表現を名詞化して「に」に続け、「点」のばあいは、全体のなかのあるところを指示する役目を果すといえよう。後者はいわば「場所化」の手続きをふましめたものともいえる。

- c. 傾向、情況を示す語「形勢」「傾向」「事情」「情勢」「状態」などの名詞 (1.1301) につく。これは b. のなかに含めることができるが、新聞ではこの一群の語が比較的まとまって現われるので、一類とした。

○最近になって急にその数がふえる傾向にあり ○設備投資の本格化する状態にある ○整理される傾向にある ○下請への発注がふえる傾向にある ○予断を許さない状態にある ○足踏み状態にある

(c1-2) 「近くにある」の意味で用いられた動詞「ひかえる」。やはり場所 (1.17), 時間 (1.16, 1.19) などの名詞に続く。

○統一ストを26日にひかえ ○広い芝生を家の前にひかえ

(c1-3) 停留の意味の動詞「とどまる」「とどめる」(2.1512)。用法をいくつかに分けることができる。

- a. 「しばらくいる」「しばらくおく」の意。場所を意味する名詞、主として地名 (1.259) などに続く。

○大兵を大坂城にとどめたまま \*とうぶんの間京都にとどまっては (小泉八雲・鏡のおとめ)

- b. 「それだけにする」「それだけになる」「限る」などの意。変動、変化、人間の行為 (1.15, 1.3……) などの名詞に続く。

○GMは18ドルの下げに止まる ○小幅の増収益にとどまりましょう  
この類は動詞類につくことがある。

○参考意見を述べたにとどまる (述べるにとどめる, など)

- c. 上項 b の特定の形で「……にとどまらず」。

○単なる形の問題にとどまらず

(c1-4) 起立、横臥などを示す動詞 (1.1513), 「横たわる」「立つ」「寝る」

など。「に」の前にその動詞のおこる場所を示す名詞がくる。

○海底(1.5)に横たわった ○横須賀港(1.2)によこたわる ○二階(1.4)に寝ていた ○二段ベット上段に寝ていた ○八畳間に寝ていた ○被告(1.17)に立たせ ○長期的視野(1.1720)に立つ

最後の例はややひゆ的。

(c1-5)「うづくまる」2.3391。場所その他を表わす名詞につく。

○へやのすみにうづくまる ＊かれ草にうづくまって寒さをしのいだ(今西祐行「肥後の石工」)

(c1-6)「見る」「目をつける」「目をすえる」「注目する」など2.3090の動詞。「見る」のばあいは、見る場所の範囲を示し、場所を示すことばがくる。

○目の前に見た「セールスマンの死」 ○アメリカに見る古さ

「目をつける」は見る対象を示し、名詞の範囲が広い。

○暗い海面に目をつけ ○書類審査ですまされる点に目をつけ ○彼女のもつバイタリティに目をつけ ○採算第一主義をとっていることに注目 ○新しい技術に着目

(c1-7)「のぞむ」「そう」「むかう」「むける」など、位置2.17の動詞。位置、場所、方向、ものなどを示す名詞と結びつく(1.17, 1.25~27, 1.4, 1.5など)。

○狙撃兵の方へむけて ○顔を横にむける ○日本海にのぞむ ○海岸にそって △顔を洗って膳に向かったとき、女はにこりと笑って(夏目漱石「三四郎」)

「むかう」が移動の動詞のときは別立。

(c1-8)「現われる」「登場する」「出席する」「出る」など2.121の動詞。場所を意味する名詞1.24~27のほか、人間活動1.3ほか「ソノシート」「テレビ」など1.4)の名詞とも結びつくが、いずれもある意味で人間活動の場を意味するともいえる。

○教科書に登場 ○ソノシートに登場 ○テレビに登場 ○マスコミに登場  
○法廷に現われる ○大会に出る ○集まりに出席 ○決算委に出席 ○委員  
会に出席 ○会議に出席 ○総会に出席

(c1-9) 「生まれる」, 2.581の動詞。主として場所を意味する名詞につく。

○東北の地に生まれる ○東京に生まれた ○日本橋の芸者に生まれた一種  
の落とし子だった。

最後の例は「……の家に」の意味か。

(c1-10) 「寝る」「住む」など2.333関係の動詞。「寝る」は主としてへやを  
意味する名詞(1.4), 「住む」は人間活動の場(1.25~)等の名詞と結びつく。

○二階に寝ていた ○八畳間に寝ていた ○ベッド上段に寝ていた  
○アルゼンチンに住む ○神戸に住む ○マニラに住む ○江戸川区に住む  
○近くに住む

(c1-11) 整備, 設置に関する動詞, 「そなえる」「設置する」など(2.130)。  
その動作のおこる場所を示す名詞が助詞「に」の前にくる。

○予定地点よりずっと先に設置する ○警察庁(1.272)に備えられた電子  
計算機。

(c1-12) 「すえる」2.1515の動詞。置く場所を「に」で示す。助詞「を」を  
共にとることが多い。前は場所を意味する名詞1.17, 1.25~27。

○像を町の広場にすえる ○ストーブの前にすえる  
前の名詞が人間のポスト1.24であることがある。

○彼を会長にすえる

(c1-13) 「指定する」, 2.3091の動詞。場所を意味する名詞(1.25~)その  
他につく。

○危険区域に指定する ○汚染区域に指定する ○モデルスクールに指定す

る \*国定公園に指定する

(c1-14) 「通じる」2.1525の動詞。ふつう場所を示す名詞1.25~27につく。

\*わたしは、高原別荘地に通じている山道をのぼっていきました(今西裕行「月とゴイサギ」)

ひゆ的に

○この珍現象はまさに日本的伝統をもとにして発達した日本の雇傭であるいわゆる家族ぐるみ(丸抱え主義)に通ずるものと思われる。

「事情に通ずる」もこれに連なるものであるが、別立した。

C2 助詞「に」の前に具体物を現わす名詞がくる動詞。

(c2-1) 「もつ」という2.370の動詞。「手」(1.573)という名詞について具体的行為を示し、肉親の呼称(2.212)のばあいは人をあらわす名詞に助詞「を」を添えた形を伴って、やや抽象的な意味をもつ。「に」の前が場所的な意味をもつばあいが種々考えられるが、調べた範囲には出てこなかった。なお、「もっていく」の形で、レベル、水準を示すことばや数字と結合し、また物を示すことばと結合する。もつものは「を」で示す

○手にもつ ○後手にもつ ○障害児をわが子にもつ ○団蔵を父にもつ  
名門の出

(c2-2) 「つける」「帯びる」など2.113の動詞。「体」「身」など1.5の名詞と結びつく。対象は「を」で示す。

\*いままで腰に帯びていたたちは(菊地寛「十三の頼朝」) ○男として身につける最も大切なもの ○芸を身につける

「つける」は更に広い用法がある。

\*頭を地につける

(c2-3) 「あてる」「さわる」「ふれる」「つく」「つける」など2.1560の動詞。

具体的なものを指示する名詞につく。

○蛍光板にあてる ○足にさわる ○手につく ○背中につける ○身につく

慣用的な言い方として、「折にふれる」「気にさわる」など。

「あてる」「さわる」のひゆ、転義的な用法として、「遊興費にあてる」「指導にあてる」「身体にさわる」などがある。これは別グループにすべきであろう。

(c2-4)「掛ける」「掛かる」を中心に「ひっかける」「ひっかかる」など2.1515の動詞。

a. 具体的なものを示す名詞につづく。「かける」「かかる」「ひっかける」「ひっかかる」いずれも使う。

○壁にかける ○横にかける ○架線にかける ○くぎにかける

b. 具体物でないもの。「ひっかける」「ひっかかる」系は使用されず、「かける」「かかる」のいずれかが使用されないことがある(本来D)。

○せり売りにかける ○病気にかかる ○……の態度にかかっている ○その使命はこれからの日本をせおう諸君にかかっている ○……かどうかにかかっている。

後の三者は依存の意。

c. 慣用的な言い方。

○気にかかる ○気にかける ○……にかけては ○……から……にかけて

最後の例は名詞が1.16, 1.17のことが多い。

(c2-5)「もたれる」「よりかかる」「たてかける」など2.1562の動詞。家具、建築物などの名詞と結びつく。特に「立っているもの」というようなイメージのあるものと結びつく。

○らんかんにもたれる ○壁によりかかる ○へいに立てかける

次のような用法もある。

＊雪のふる夜にかあさんのひざにもたれて思うこと(西条八十「おもちゃの

円)

(c2-6) 「沈める」2.1541。助詞「を」と共に用いられ、「湖、海」などを意味する名詞(1.259, 1.17, 1.525)と結びつく。

○紅海に沈める \*海底に沈める

(c2-7) 「しみる」「しみこむ」「滲透する」など2.1532の動詞。「なか」(1.17)や物の名(1.4, 1.5)と結びつくことが多い。

○生活の中に滲透する ○胸にしみるような ○紙にしみる ○歯にしみる  
○きずにしみる ○身にしみる

(c2-8) 「とじこめる」「とじこもる」「ひそむ」など2.1532の動詞。建物やへやなどを意味する名詞1.17, 1.4, 1.2などと結びつく。

○エレベータのなかにとじこめられた ○二階八畳間にとじこめられ ○うちにとじこもる

(c2-9) 「はまる」「はめる」など2.1516の動詞。なかにものがあるような形をしたものの名の名詞につく。1.4が多い。

○戸のみぞにはまる。

抽象関係の名詞のこともある。

\*条件にはまる

(c2-10) 「いれる」「収容する」など2.1530の動詞。なかに入れることができるようなもの、場所、機関など1.17, 1.2の名詞と結びつく。

\*なかに入れる ○病院に収容

○手に入れる

(c2-11) 「包む」「くるむ」などの2.113の動詞。「紙」「きれ」「ふろしき」など1.4などの種々の名詞とて合する。対象は「を」で示す。

○現金五万円を紙に包み ○黒のダブルに包んだ大きな体 ○レインコート  
にくるんだ三十センチ四方ぐらいの包み

(c2-12)「乗る」2.1541。乗り物(1.465)、動物(1.561)や位置を示す名詞(「上」など1.17)と結びつく。

○電車に乗る ○タクシーに乗る ○馬に乗る ○台の上に乗る

なお次のような用法もある。

○気に乗る ○音楽に乗る ○軌道に乗る ○その手に乗る ○相談にのる

○経済が安定基調に乗る

D どちらかといえば具体的なものを示さない名詞をとるグループ。動詞の意味は具体的な行動ではなく、Aに似ている面もあるが、「に」の前にくる名詞には特定の制限のあることが多い。

D1 範囲の制限あるいは指示。

(d1-1)「しぼる」2.1570。「に」と結びついて大切なものを残して他を除く」意味になる。新聞では数を意味する名詞(1.19)の用例だけが得られた。対象は「を」示す。

○一人にしぼったという念の入れ方 ○次の四つにしぼられた ○一本にしぼった ○議題を一つにしぼって

(d1-2)「限る」「限定する」など、2.19の動詞。名詞に本質的な制限はないが、どちらかといえば数に関することば、1.19の名詞がしばしば現われる。

○二国間に限ってみても ○管楽器に限っている ○茨城県に限った ○一部の業種に限って ○交通工学に限って ○三地点に限って 今回に限り  
\*問題を二つの点に限定する

(d1-3)「引きあげる」「引きさげる」「切りあげる」など、2.1581の動詞。

動かす先を示す名詞と結びつくが、これらの名詞は、数字関係 (1.19)、コスト (1.3)、地位 (1.24)、場所 (1.17) などであることが多い。

- ……パーセントに引きあげる ○倍額に引きあげる ○倍に引きあげる
- \*課長に引きあげる \*高いところに引きあげる
- 江戸に引きあげる

## D2 時間・空間的な意味をもつ名詞をとる。

(d2-1) 「そなえる」2.308 準備する意。将来を意味する時間を表わすことば (1.16)、あるいはそれのついた句などにつく。未来、これからのこと、予想されるある事態などが一つのセマンティック・コンポーネントになっている。

- 将来に備える ○将来の発展にそなえる ○豊かな老後にそなえる ○最悪の事態にそなえる

最後の「最悪の事態」は分類語彙表の番号で1.103 & 1.1301となろう

(d2-2) 「発展する」2.198の動詞。人間の行為や自然現象などを意味する名詞と結合する例が得られた。このようなばあいは、出来事の推移を示すものだろう。

- 両者のはげしいのしりあいに発展した ○それが子どもたちの招待に発展 ○爆発型の地震に発展している

「中都市に発展」などのばあいは、上のと少しちがう。

(d2-3) 「のびる」「のばす」など2.1581の動詞。時間 (1.16, 1.19) あるいは空間 (1.17) ほかを意味する名詞と結合する。

- 公演の初日を5月1日にのばす ○5月1日にのびる \*雨のため遠足は1週間先にのびた

(d2-4) 「もちこす」(2.16)。日付、催しなどを意味する名詞 (1.16, 1.19,

1.3……)などと結合。

○決定は28日朝にもちこされ ○四月以降にもちこしとなる ○21回総会にもちこされ

### D3 その他

(d3-1)「通じる」という2,312の動詞。「事情」「実情」「形勢」「事態」など1,1301ほかの名詞と結合して用いられる。

\*この辺の事情に通じている(漱石「坊ちゃん」) ○いわゆる「家族ぐるみ」に通じるものがある

(d3-2)「加える」「加わる」など2,158の動詞。増加、参加などの意。名詞の種類ははっきりしない。

○浅草も警戒地域に加えて ○冬期は天狗山スキー場をはじめ、御成山スキー場、愛相の峯スキー場に加えて、今冬より温泉よりバスで25分……青葉山スキー場、振子沢スキー場の二大スキー場が解放され ○富士(第三学区)、竹早(第四学区)、小松川(第六学区)を、男子有名校の学校群に加え男女共学の学力水準をそろえた

○船価の上昇に加え ○農業近代化の夢も大きく、昨年までの「うまい米づくり」に加えてことしからは米の量産運動も盛 ○議員もこれに加わって

○乱闘に加わった三十数名 ○共同提案国にかわる

「行なう」意味の「加える」は別にした。

(d3-3)「つなぐ」「つながる」など2,1554の動詞。「続く」などと同じところがある。前にくる名詞にあまり制限がないが、ある固定したもの(杭、ブイ、岸など)が多く、またひゆ的に時間や人間の行為所産関係の用語と結びつくこともある。

\*杭に山羊をつなぐ \*舟を岩壁につなぎとめる ○胴体の底が左右両翼につながって ○夢を未来につなぐ ○この研究は企業の収益につながる

(d3-4) 「続く」「引き続く」など、2.1503関係の動詞。これは前にある名詞に語類の区別があまりないようである。がどちらかといえば、時間的な順序、場所的な隣接に関係する意味のことが多い。したがって1.16, 1.17, 1.2, 1.3 1.5などの名詞が前にある。

○前日に続き続落の気配 ○39年に続く不作 ○スエズ運河に続く紅海で  
○原告側の弁論に続き午前から ○「鎖の大陸」「タブー」に続き、地球の  
恥部、文明の末路をあばく長編 ○戦闘再開に続くエスカレーション  
○「あなただけ今晚わ」につづくピリーワイルダー監皆のライト・コメディ  
ー ○前作に引き続いて同じ顔ぶれの監皆、主演者でつくられた ○これに  
引き続いて43年度完成

(d3-5) 「対処する」2.3850。この動詞は、情勢、状態(1.130)、変化(1.15)関係の名詞、人間の行為(1.3)関係の名詞と結びつく。情勢のばあい、「新」などがつき、その変化を含意する。

○戦闘激化に対処し ○競争激化に対処 \*新情勢に対処する \*危険に対  
処する ○必要に応じて放出に対処 ○この問題に対処して \*労働攻勢に  
対処する

(d3-6) 「利く」「効果がある」がなど、2.131的な表現。「効果的だ」という言い方もある。主として病気(1.586)、感覚(1.300)などの名詞と共に用いられる。感覚といっても病氣的で、ここに共通の意味的特徴が見られる。

○かゆみにきく ○がんにきく抗生物資 ○そばかすにきくホルモン ○胃  
と腸の両方にきくタフマック ○がんこなつかれに効果的 ○記憶力障害に  
効果的

(d3-7) 「富む」という貧富の意味のグループの動詞。名詞はいろいろだが、資源など1.5関係を中心に、1.3(行動)、1.16, 1.14(力)などの名詞につく。1.14「力」といっても、人間の能力などをさすことが多く、1.16といっても人間の経験の意。したがって全体としては天然の資源、材料、人間の資質、能力などの意味特徴が共通。

○経験に富む ○天然資源に富む ○文才に富む ○春秋に富む \*想像力に富む \*実行力に富む

(d3-8) 「輝く」という2.501の動詞。「電灯に輝く」というような例も考えられるが用例は主として次のように、1.3関係のものが多かった。

○グッドデザインに輝く ○勝利の栄冠に輝く ○ノーベル賞に輝く

次のような例もある

\*緑に輝く牧場

E この類の動詞は人間の行為を示し、助詞「に」の前には人間、その組織、集団などがくる。

(e-1) 「あこがれる」「ほれる」「なじむ」「あまえる」など2.302関係の動詞。「に」の前には人を表わすことば(1.2)がくるのが多いが、それ以外(1.25～, 1.3, 1.5など)のこともある。

\*彼女にほれこむ \*人柄にほれて \*親に甘える \*東京にあこがれる  
\*理想にあこがれる

(e-2) 「望む」「期待する」「俟つ」「祈る」など、2.3041の動詞。人を表わす名詞(～1.24)を中心として、そのほかの用語と結合する。

\*学生に望む \*若い世代に期待する \*君にまつところが大きい ○仏様に祈る ○同社の先途に期待する ○民主化に期待する ○諸君の良識にまつほかはない

(e-3) 「会う」および「会わす」「お目にかかる」など、2.351の動詞。人間(～1.24)その他の用語につく。

a. 人(～1.24)につく。「お目にかかる」「会わす」などはこの用法だけ。

○友人にあう ○朱徳氏にあう

b. 人間の行動(1.3)の名詞。

○はさみうちにあう ○反撃にあう

○交通事故にあう ○被害にあう ○災難にあう ○わざわざにあう ○  
苦難にあう

人間の積極的な行動「はさみうち」「反撃」などとそうでないものとに分けることができよう。

c. 自然現象 (1.5)。

○なだれにあう ○地震にあう ○あらしにあう

動詞「あう」は助詞「に」をとるが、動詞「たずねる」は助詞「を」をとる。

(e-4) 「言う」「知らせる」「急報する」「報告する」「通告する」「通報する」「つげる」「言い渡す」など、言語・表現・報知2.312の動詞。人間、人間集団、機関などを意味する名詞 (1.2関係) につく。

○なかまに知らせる △自分は婢に「冴え返って寒くなりましたね」と云った(夏目漱石「行人」) ○職業安定所に報告 ○駐在所に急報 ○政府に通知 ○千住署に通報 ○厚生省に通報 ○わたしに告げる ○犯人に刑をい  
いわたす

伝達の内容は助詞「を」「と」を用いる

このほか、「一口にいうと」のようなイディオマティックなものもあり、出典などをあげるばあいの原典 (1.3) が前にくこともある。

○中間報告にいう

(e-5) 「呼びかける」2.310の動詞。人を表わす名詞 (~1.24) につく。

○黒人有権者に呼びかけるハイ・マイアミ市長 \*ストウ夫人は、憤然として、ペンを取りあげ、イギリスの国民に呼びかけたのです(山本有三「ストウ夫人」)

(e-6) 「こたえる」など 2.313の動詞。人間 (1.2) の意味を含む名詞と結合。

○生徒にこたえる ○学生にこたえる

(e-7) 「働きかける」「誘いかける」など2.351の動詞。人およびその集合(1.2)関係の名詞につく。

○政府に働きかける ○東京都に働きかける ○先方に働きかけて事を円満に解決する

(e-8) 「頼む」「依頼する」など2.352依頼の意味の動詞。助詞「に」の前は人を意味する名詞が来る。人でなく機関(1.264)のこともある。

○団員の一人に依頼する \*友人に依頼 ○取引銀行に依頼する ○人にしたのむ ○安定層に依頼

最後の例は人を意味するのであろう。

(e-9) 「投書する」「届け出る」「申しこむ」など2.314の動詞。機関をいい表わす名詞(1.27)に結びつく。

○新聞に投書 ○船橋署に届け出る ○保健所に申しこむ

次のような表現もある

○左記に申しこんでください

(e-10) 「提出する」「出す」など2.313の動詞。主として人間(1.2)関係および人間の集まり(1.35)などの名詞につく。

○今国会に提出 ○大会に提出 ○委員会に提出 ○先生に提出する ○国会に出す

(e-11) 「捧げる」「献上する」「ゆずる」など2.377の動詞。主として人間を示す名詞(1.2)につく。

○全女性に捧げる感動の名編 ○……を浩宮様に献上する ○院長の職を人にゆずる \*夫に愛情を捧げる \*亡き先生に捧げる \*その犬をおれにゆずって \*知人にゆずる

「ゆずる」は後の時間の意味を含む名詞とむすびつくことがある。

\*後日にゆずる \*またの機会にゆずる

また、次のような使用法もある。

○ベトナムにおいて力にゆずることがあれば

(e-12) 「仕える」2.332の動詞。人や機関などの名詞(1.2)と結びつく。「サービスする」という語も同類。

○新しい主人につかえた \*夫につかえる \*朝廷につかえる

(e-13) 「習う」など2.305の動詞。人を意味する名詞(1.24)、特にの名詞(「教師」など)と結びつくが、「手本にする、まねる」の意味では方向、地名などの名詞もうける。

○こんなえらい先生にならって ○右にならう ○中共にならって

(e-14) 「預ける」「返す」「横流しする」など2.378の動詞。主として人間を意味する名詞(1.2)につく。

○北尾さんに預けた ○この問題の解決はあなたに預ける ○「防衛」を日本に返す ○持ち主に返す ○香港に横流しする

主として「……を……に～」の構成。

(e-15) 「売る」「売却する」など2.376関係の動詞。人や人間活動の場を示す名詞(1.2)と結合する。「……を……に」の構成。

○証券界は安定株主に売りさばればよいと…… ○リ(個人名)に売っていた ○直接市場に売却

(e-16) 「競争・攻防・勝敗」を意味する「いどむ」「勝つ」「負ける」「屈する」「対決する」「対抗する」など。人を意味する。名詞ばかりでなく、その他のものにもつく。人や機関のばあいには競走、攻防などの相手を示し、「闘争」のような人間活動のばあいには攻防の場を示し、「欠陥」「逆境」のような条件を示すこともあり、「スモッグ」「事大主義」のようにひゆ的な示し方もある。

- やくざの親分にいどむ
- 古河、相銀に勝つ
- 共産陣営に対抗
- スモッグにいどむ
- 保守性と事大主義に対決
- 米国防総省鉄鋼値上げに対抗
- この闘争に勝つ
- 逆境にまけない
- 欠陥にまけない

(e-17) 「反対する」「反撥する」など 2.353 の動詞。主として人間の行為関係を示す名詞 (1.3……) と結びつく。

- 運営規則に反対
- 政策に反対
- 解任に反対
- 北爆再開に反対
- 値上げに反対
- ああいふ結末をつけることに反対
- カンボジアなどへ戦争が拡大することに反対する
- 大人たちのただれた生活に反撥して
- 小口買いに反撥

最後の例では「に」は理由を示す

(e-18) 「先がける」「先立つ」など 2.1525 の動詞。人間 (1.2) および人間の行為 (1.3) 時間 (1.15) 関係の名詞と結びつく。

- 業界に先がけて \*多くの荒武者に先駆けて進む
- \*他人に先立って仕事をしなければならぬ
- 閣僚折衝に先立ち \*この戦争に先立って小さな紛争が何回となく起こった

(e-19) 「加える」。意味は「行なう」2.342と同じ。対人的用法が多く、「に」の前は人 (1.2) の名詞で、「を」で示される名詞は「テロ」「暴力」「危害」など。

- 彼らが南ベトナム人に加えているテロ

F この類の動詞の前にくる名詞は主として人間の行為を示す。動詞自身は人間の行為を示すものもあり、そうでないものもある。

F1 この類の動詞は主として人間の行為を表わし、名詞も人間の行為を意味するものが多い。

(f 1-1) 「参加する」「加わる」など2.354の動詞。主として人間の行動(1.3)および行動する団体(1.2)を意味する名詞と結びつく。

○乱闘に加わる ○共同提案国に加わる ○大学運営に参加する ○ゼッケン運動に参加する ○この会議に参加する ○経営に参加する ○観測隊に参加する ○調停に参加する ○大発展に参加する ○進歩と変革に参加する

(f 1-2) 「出席する」「出頭する」「出る」など2.351の動詞。出席の方は「会議」「委員会」「授業」など人の集まりを意味する名詞(1.27, 1.3など)と結びつく。

○学界の集まりに出席 ○参院決算委に出席 ○委員会に出席 ○会議に出席 ○総会に出席

「出頭」の方は主として機構名(1.27)の名詞に結びつく。

○博多署に出頭 ○都本部に出頭 \*クララは翌日も、翌々日も、また補給局に出頭しました(山本有三「はにかみやのクララ」)

(f 1-3) 「協力する」など2.365の動詞。人や団体をあらゆる名詞(1.2), 人間の行為関係(1.3)の名詞と結びつく。

○マリ子に協力 ○警察官に協力 ○MVDに協力 ○この線の実現に協力  
○生産性向上に協力 ○輸出対策に協力 ○戦争に協力 ○募金に協力 ○調査に協力する

以上は雑誌九十種のカードによる。

○問題の解決に協力する ○健全な発展に協力する

以上は新聞調査の例

\*恩師の研究に協力する

(f 1-4) 「こたえる」「応ずる」など, 2.352の動詞。主として人間活動を意味する名詞と結合する。

○動きに応ずる ○調べに応ずる ○相談に応ずる ○持分に応じて ○話

しあいに応ずる ○団交に応ずる ○好評にこたえて ○応募にこたえる  
○要望にこたえる ○必要に応じて

次の例は特殊な例であるとするべきであろう。

○胸にこたえる

(f 1-5) 「努める」「耐える」「はげむ」など努力、忍耐を示す2.304の動詞。  
このばあい、主として人間の行為を示す名詞(1.3)につき、努力、忍耐の行為の行なわれる範囲を示す。

○分析にたえる ○苦しい山登りにたえる ○掌握につとめる ○排除につとめる  
○発展につとめる ○体作りにはげむ

(f 1-6) 「成功する」「失敗する」などの動詞。人間の行為(1.3)あるいは人間が関与する動作(1.15, 1.5など)を意味する名詞と結合。

○模擬試験に失敗 ○戦争阻止に失敗 ○着陸に失敗 ○組織化に成功 ○核爆発に成功 ○飛行に成功

(f 1-7) 「賛成する」「共鳴する」「賛同する」「反対する」など2.3532の動詞。これらは人間の活動を意味する名詞(1.3)と結びつく。

○引退に賛成する ○北爆に賛成する ○会議の開催に賛成する ○規則に反対する  
○政策に反対する ○解任に反対する ○値上げに反対する ○北爆再開に反対する

(f 1-8) 「頼る」など2.3681の動詞。人間の行為関係、人間(およびその集団)などを意味する名詞につくことが多い。

○変わったすじの興味にたよった一編の「話」 ○利益を価格の引き上げだけにたよっているサービス業 ○公共団体がやるべきしごとを寄付にたよるのは \*その当時、島の海岸に住むエスキモーたちは海で魚や貝をとるほかは、くらしに必要なものをなんでも、数すくない陸のけものにとよっていたのだ(岡野薫子「銀色ラッコのなみだ」)

(f 1-9) 「あたる」という2.340の動詞。

a. 人間の行動を意味する名詞について、従事、担当などの意味を表わす。

○刈り入れにあたった ○決定にあたる ○再検討にあたる ○仕上げにあたる  
○実施にあたる ○指揮にあたる ○捜索にあたる ○調査にあたる  
○引きとりにあたる ○編集にあたる

この結合で、特に「あたっては」などの形で、「際して」の意味になることがある。(cに同じ)

b. 対人関係。1.2の名詞

○いい先生にあたる ○敵にあたる

c 「……するにあたり」の形。前は動詞。

F 2 この類の動詞は人間の精神の状態を示す。

(f 2) 「困る」「苦しむ」「驚く」など気分、情緒を表わす2.301の動詞。このばあい助詞の「に」はその原因になったことを示す名詞につく。したがって名詞は人間の行為(1.3)、状態(1.1)などであることが多い。

○批評に困る ○期待に驚く ○物価高に苦しむ ○高さに驚く ○ゆたかさに驚く

F 3 この類の動詞は人間の行為ではあるが、名詞はかなり制限された範囲のものである。

(f 3-1) 「出演する」という2.383の動詞は、1.324の映画・演劇(あるいはテレビ)関係の一連の名詞や題名、1.323の音楽と結びつくことがほとんど。

○民音公演に出演する ○芝居に出演 ○「宮本武蔵」に出演する ○「花もくらん」に出演 ○「ドラム合戦」に出演する

(f 3-2) 「掲載する」という2.383の動詞。新聞、雑誌、ページなどを意味する、1.3、1.1などの名詞と結合する。「……を……に」の構成のことがある。

○本紙に掲載する ○「茶の間」は2面に掲載する \*雑誌に論文に掲載する \*地方版に……が掲載される

F4 この類の動詞は人間の行為を示さないが、前にくる名詞には人間行動に関係したものがくることがある。

(f4-1) 「由来する」のような、2.330の動詞。人間の行為状態、人間の活動の場などの意味のある名詞につく。

○日本独特の偏見に由来する ○遠くギリシアに由来する美術

(f4-2) 「いる」「要する」など2.121の動詞。しごと、など人間の行動を意味する名詞1.3と結合する。

○このしごとには金が要る ○取り扱いには細心の注意を要する

(f4-3) 「値する」という2.133の動詞。人間行動関係の名詞(1.3)につくことが多いが、数字関係(1.19)につくこともある。肯定形のばあいはなにかよい価値がある、ことを暗に含んでいる。

○注目に値する ○名に値する ○賞賛に値する ○千円に値する ○顧問にも値しない

(f4-4) 「欠ける」という2.130の動詞。人間の行為(1.3)に関する名詞と結合する。

○思索に欠けるところがある ○戦いを続ける意志に欠け \*同情に欠ける  
○才能に欠ける \*常識にかけている

F5 この類の動詞には人間の行動を示すものもありそうでないものもあるが、名詞は人間の行動を示すものがある。

(f5-1) 「代える」「代わる」「きりかえる」など2.1501の動詞。主として人

間関係および人間の行動などの名詞1.23, 1.3などにつく。

○発送をもって発表にかえる ○小林さんが兄弟にかわって兄さんをさがして  
○みなさまにかわってお世話させていただきます ○太尉にわかるように  
に英語に切り換えて ○注意報から警報に切り換えて

(f5-2) 「終わる」「始まる」など、開始・終了2.1502の意味の動詞。主として人間の行動関係の名詞1.3につく。抽象関係を示す1.1関係のものもあるが、どちらかといえば1.3寄りの意味で使われているものが多い。

○ぬかよるこびに終わった ○一時的なムードに終わる ○失敗におわった  
○物別れに終わった ○産声に始まる ○問題提起におわった ○破滅に終わる愛  
○小甘い動きに始まる

(f5-3) 「墮する」2.1540。「落ちる」に似ているが、抽象的な表現に用いられ、人間行動(1.3)やその性質(3.3)などと結びつく。

○側近政治に墮するおそれがある \*柔弱に墮する

(f5-4) 「みせかける」という2.3091の意味の動詞。句(文)などが前にくる。「ように」という言い方もある。「と」の言い方がない。

○七階あたりで転落と見せかけて ○右でパンチをうつように見せかけて  
以上は雑誌九十種の例。

○交通事故死に見せかけてころしてくれたら

この語は、全体としては前に句があるという傾向がつかよいかもかもしれない。名詞があるばあいにも、「それが交通事故死だった」という意味であるとも考えられる。

G 最後に、動詞ではないが、「に」をとる形容詞、形容動詞およびそれに近い一種の表現などについて、用例の得られたかぎり、ほんの少しふれておく。

(g-1) 「熱心」「乗気」などの形容動詞。人間の行為の意味の名詞(1.3)を

とることが多い。

○研究に熱心 ○しごとに熱心 ○弟の良縁に乗気である

「夢中」も同じような使い方があがるが、1.2, 1.4, 1.5など人やものを意味する名詞にもつく。

(g-2) 「近い」という3.1920の形容詞。これにはいくつかの用法がある。

a. 具体物を指示する名詞1.25～, 1.4, 1.5について、具体的に距離が近いことを示す。

○尾翼に近い方 ○東京に近い ○相模湾に近い

b. 人名について「親しい」「側近」を示す。

c. 数量などについて近似の意。

○百名に近い

d. 名詞、形容動詞などについてcと同様の用法。

○気がいざたに近い ○不可能に近い

(g-3) 「強い」3.14という形容詞。自然現象(1.5), その他の名詞につくが人間の行動(1.3)につくのは新しい用法か。

○熱に強い ○英会話に強くなる ○飛車に強いかこいです

(g-4) 「ない」という3.120の形容詞。「ある」に比べ全体としてイディオマティックな点が目立つ。

○……する以外にない ○眼中にない ○近年にない ○ほかにないか ○日本人のお正月にないような社会的重要性

(g-5) 「ほかならない」「すぎない」「ちがいない」「相違ない」などの表現。これらは指定の助動詞のような用法に近く、名詞に限らず広く各種の語と結合する。

○……を感じとっているからにほかならない ○繁栄にほかならない ○かろうじて知られているにすぎない ○適用されるにすぎず ○水準訂正の動

きにすぎない ○考えが背後にあるにちがいない ○むねをうつにちがいない  
い ○多いにちがいない ○考えるにちがいない ○長引くにちがいない  
○偏見に由来するものにちがいない ○必ずくるに相違ない

### 3. シntagマの研究と今後の問題

本稿では助詞「に」を含む動詞句の構造に関する分析を行なったが、これは最終的な報告でなく、その中間報告、むしろ 第一歩の報告であると考えている。それは方法的に不十分であり、資料も不足しているからである。方法的に言えばある人々のいう semantic component あるいは semantic features を各動詞、各名詞についてもっと徹底して洗い出し、シntagマにおけるその結合のすがたを明らかにすべきであろうし、そのためにはさらに多くのデータを必要とする。データについては、将来この10倍にする予定であり、その時点で改めてこのような分析をすることがよいであろう。しかし最初から大規模なデータを扱うと、かえって全体像が掴みにくく、労力も要するので、このような比較的小規模なデータについてまずあらわけ、概観を行なって分析の方針を立て、大量のデータが得られたとき、この方針を吟味しつつもそれをを用いて分析を進めていくというのは、一つの有効な方法ではないかと考えられる。本稿が中間的な報告であっても、それなりに役立ちかつ将来の分析のためにそなえるということで、そこに十分な意義がみとめられると筆者は考えている。

助詞「に」の意味についてまず分析し、それにあう名詞と動詞の組み合わせを並べるという行き方を本稿ではとらなかった。それとちょうど反対の方法をとって、まず動詞の意味によって動詞句を分け、その前にくる名詞を分析してこんどはその種類によって動詞句を分け直すという方法をとった。助詞の機能はそのなかで述べているのであるが、しかしこれで十分であると考えているわけでは決してなく、そこに問題のあることについても考えてはいる。いま例をあげるとすれば、「反撥する」という動詞はふつうは人間の行動を意味する名詞を「に」の前にとるが、このばあいの意味は必ずしも同じでないことがある。

学生の動きに反撥する

## 小口買いに反撥

この両者は形の上では似ているが、「に」の機能は違っている。前者は動きに対する反撥であり、後者は動きを契機とする反撥である。後者は理由といわれることがある。このようなことを明らかにするためには、「に」の用法全体について、そのような分類を用いて行なうのがよいであろう。本稿では、その意図を持たないではなかったが、時間的余裕がこれを許さなかった。

また、以上のようなばあいには、いわゆる「意義素」の立場からこれをとらえるとともに興味ある結果が得られるであろう。助詞「に」についても、その用法のさまざまなヴァリエーションにもかかわらず、さらに深い層においてなにか統一的な、基本的な意味が考えられるようにも思われる。それはたとえば、ある範囲を表わし、移動動詞の前ではその前の場所名詞と共に移動先を示し、対人関係動詞の前ではその前の人を意味する名詞と共に動作を受ける人を表わすという形で、具体化されると考えてもよいだろう。しかし本稿ではこの点についてもまだ十分な考えを述べることができない。

本稿でとりあげた動詞は、はじめに述べたように、新聞用語調査の KWIC で得た用例をもとにして分析したものであるが、ここに述べなかったような用法が数多くあることは予想されるし、気がつきもしている。しかしそれをあえて広げなかったのは、それなりの理由もある。それは、新聞用語調査が用語調査であり、計量的な調査であるので、そこに現われた用法を記述することには意味があると考えたのである。用例で他の書から得たものと新聞用語調査から得たものとを区別したのは、同じ理由によるのである。

本稿では動詞の意味用法の相違に応じてその動詞を二か所以上のグループに配置するように心掛けたが、一部徹底していないものが残ってしまった。これは、たとえば「通じる」という動詞が主として人間活動の場を示す名詞につくときは動詞自身動きを意味する2.15関係の意味になり、前に様相を意味する名詞(1.13)たとえば「事情」などがくれば動詞もまた認識・知解の意味(2.3060)になると考えられるが、このようにはっきりしているものについてはなるべく分属を徹底するようにつとめた。しかし連続的なもの、あるいははっきりしないものについては、やむを得ず、関係したところで合わせて述べたこともあっ

て、十分徹底しないものとなってしまった。

名詞の意味の記述のばあい、「分類語彙表」の各欄に分属しているものをいちいち列挙せざるを得なかった。たとえば動詞「行く」については、1.2, 1.17, 1.5, 1.4などを挙げざるを得なかった。たとえば「学校に行く」、「駅のそばに行く」、「海に行く」、「別荘に行く」などの例があるからである。しかしこれらの名詞には共通してなんらかの意味で場所にかかわりがあるという特徴が見られる。そこで例のプラス・ロカティブというような見方をすれば、この記述はもっと簡単になる。「アルバイトに行く」は +loc. でないわけである。このような記述は、さきにも述べたように semantic features の記述ができればよいのであろうが、そこまで十分には行なえなかった。しかしこのような研究を通してそれにアプローチする方法もあると考えられる。ただ一部の動詞ではこのような記述を試みてみた。「よりかかる」などはそうである。

名詞の意味に関連して、名詞の意味だけでは不十分で、その前にくる修飾語が必要になることがある。たとえば「肌になる」という表現ははなはだ不完全であって「すべすべした白い肌になる」というような、名詞の限定が必要である。形式名詞の「こと」のばあいは、いうまでもないことであって、「ことにする」「ことになる」では不完全である。動詞のもっている semantic feature がそれを要求することもあり、「将来の発展にそなえる」などの表現では、「そなえる」が何か未来のことに関するものを期待する要素があるのに対し、「将来の」という表現がこれに呼応し、補足するというような構造があるものと見られる。このような意味の構造についてはそれを表現しうるような方法を見つけることが必要である（筆者はこれを国語研報告31において行なった）。

本稿では助詞「に」を取り扱ったが、はじめに述べたようにこれは日本語のシンタクティックな構造の一つをとりあげたもので、これだけではもちろん十分でない。他の助詞、たとえば「を」「が」「へ」「と」「で」「よい」「から」など「名詞——動詞」の構造をつくるものについても分析しなければならないのであり（とくに「へ」「まで」「から」などとの比較は重要）、「用言——用言」の構造でも同様である（主として接続助詞）。助詞「を」については、国語研究所の留学生福渡淑子氏が筆者の方針によって作業を進めてくれた（情報処理学

会CL委資料)。このような分析を多くの助詞について進め、また助詞を伴わない構造についてすすめるならば、日本語のシンタクスの基本的な関係がわかると共に、これを援用した用語の用法からみた性質をうかがい知ることができる。このようにすれば、そこから新しい意味での分類が可能になり、そのような意味からの「分類語い表」が得られることになる。これは現代用語の実態をとらえようとする、用語調査の重要な目標の一つをなすものであると筆者は考えている。それは、用語について、あるいはそれに関連する政策をたとえば考えるとき、重要な手がかりとなるものであり、基本語い設定のための、一つの側からみた最重要資料にほかならないからである。このような意味で本稿で考えたことは、用法からみた用語分類表につながり、そこから基本語いの設定の資料へとつながっていると筆者は考えている。

このように連語あるいはシンタグマの研究は、シンタクスにつながると同時に、用語の研究にもつながっている。筆者はそのような立場から、たとえばソ連のヴィノグラドフのように、この種の研究を語と同じような性質をもったもの（「ロシア語文法」）とは考えずに、むしろ文へとつながり（その意味でフォルトナトフの方に近い）、その生成の基礎をなす句として考えようとしている。したがって主語述語の間での同じような問題（日本語なら「が」で示されるようなもの）も同じように取り扱ってゆきたいと考えている。

このようなシンタグマの研究が、文の構造を機械的に分析するばあいに有効であることは、はじめにも述べたが、ここでは二三の点についてそれを補足しておきたい。これはほかの報告書でも述べたことであるが、string のもつ ambiguity を機械的にとくための手がかりになることが多い。「進む駅の改良工事」という表現では「進む」は「駅」でなく「改良工事」にかかるのであるが、これは「工事が進む」「駅が進む」というシンタグマがあるかないかを検査すれば弁別できる。「進む工事」は「工事が進む」という基本的なシンタグマの一種の transformation であるからである。このようにこの種のシンタグマの構造を精査しておき、その適用、変形によってことばのかかり方を自動的に検査してゆくことができると考えられる。「赤い屋根の家」と「あの家の屋根は赤い」とを比較してみても同様のことがいえそうである。

このようにシンタグマの研究が ambiguity を解くために使用されることもできるが、そのほか、代名詞のさすものを推定すること、表現されていない主語を推定して補なうことなどにも使用することができると考えられる。「に」の例でいうとたとえば、

……バス運賃の値上げをしたが、これに反対する西日本消費者協……  
において、「これ」は「反対する」の前に「に」がくる構造になっているから、これを人間の行為とみて前のクローズの「値上げ」をその候補の一つにすることが可能である。

清子はちょっと津田を見た目をすぐ下へ落とした。そうしてきれいにむいたりんごに刃を入れながら答えた（夏目漱石「明暗」）。

この表現にあつて後者の文には主語がないが、その主体が人間であることはほぼ明らかである。それは述語が「答えた」であり、それは人間の行為を主としてあらわすからである。この文の主語が「清子」であることは、はじめに「そして」があること、前文の主語がそうであることによるが、その辺の操作になると文章論的な範囲にはいって本稿のらち外になる。

この稿の内容ははじめ1971年5月の情報処理学会Computational Linguistics 研究委員会で発表し、次いで国立国語研究所研究部会議、計量国語学会15回研究発表会、東京言語学会10例会でその考えを述べ、いずれの会でも貴重な助言と激励のことばをいただいた。特に宮島達夫、上村幸雄、林大、林四郎、水谷静夫、奥津敬一郎、南不二男の諸氏からは多くの貴重な助言をいただいた。その他にも多くのかたがたから恩恵を受けている。

この研究は文部省科学研究費補助金「日本語の電子計算機処理のための基礎的研究」で作られたデータを使用した。

#### 4. Zusammenfassung auf Deutsch

Toshio ISHIWATA: Der Ausdruck “Substantiv + enklitisch ‘ni’ + Verb” in der Japanischen Sprache.

Eine der grundlegenden syntaktischen Konstruktionen in der Japanischen Sprache ist die Konstruktion “Substantiv + enklitisches Wort + Verb”.

In diesem Aufsatz wird der Ausdruck “Substantiv + enklitisch ‘ni’ + Verb” analysiert. Substantive und Verben werden nach ihrer Bedeutung klassifiziert. Der Ausdruck wird auch nach den charakteristischen Eigenschaften der Komponenten eingeordnet.

Das Ergebnis dieser Analyse wird benutzt als Teil der Grammatik, die in der linguistischen Datenverarbeitung gebraucht wird.

### 参 考 文 献

- N. チョムスキー (安井稔訳)「文法理論の諸相」1970  
(勇康雄訳)「文法の構造」1963
- I. Imai: Japanese grammar of zeroth approximation. Preprints for US-Japan seminar on mechanical translation 1964
- Академия Наук СССР: Грамматика русского языка II (1954)
- 奥田靖雄「を格の名詞と動詞のくみあわせ」『教育国語』連載中
- B. Ю. Розенцвейг: Машинный перевод. “Теоретические проблемы советского языкознания” 所収  
国立国語研究所「分類語彙表」(林大担当) 1964
- 南不二男「文の意味についての二三のおぼえがき」『国語研究』24
- 野崎昭弘「機械のための日本語文法」『計量国語学』38
- 栗原俊彦「日本語の機械処理」『数理科学』1969. 11
- 田町常夫「機械の文法」『 “ ” 』1966. 11
- G. Gougenheim: Problèmes de la traduction automatique 1968
- 林 四郎「文章表現法講説」1969
- 石綿敏雄, 斎藤秀紀, 木村 繁「言語単位分割自動化の研究」『計量国語学』50
- 石綿敏雄「情報処理と言語研究」『早稲田大学理工学部人文社会科学研究』4
- “ 「言語の意味と言語情報処理」国語研報告31所収
- “ 「構文解析自動化の研究」国語研報告34所収
- “ 「新聞用語調査の用例印字プログラム “COBOL-KWIC”」国語研究報告39  
所収
- 福渡淑子「連語について(その1, 名詞+「を」+動詞の型)」『情報処理学会Computational Linguistics 研究委員会資料』71—3
- 石綿敏雄『「名詞+助詞『に』+動詞」の表現構造の解析』同上